

DRAGONQUEST11過ぎ去りし時を求めずに

イレブン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界を崩壊させ、ベロニカを息耐えさせた魔王ウルノーガを勇者とその仲間達が討ち果たした後、勇者は全てを救うべく過去の世界へと飛び立っていった。勇者とベロニカ無き世界でカミュは、旅の途中で救い出した妹のマヤと共に約束通り、旅をすることになった。

※ネタバレ要素満載なので未プレイの方は閲覧しない方がよろしいと思います。

※カミュが主人公です。

# 目次

新たな旅立ち	1
過ぎ去りし時を求めた友	9

## 新たな旅立ち

カミュは、空を見上げていた。青く澄み渡る空を、ただ眺めてた。浅い青の髪が揺れ、雪国なのにもかかわらず、不思議と肌にあたる風が気にならない。

一時期こんな色の空を見ることができなかつた。真つ黒に常に覆われて、人々の気力も減退し、滅亡寸前にまで追い込まれた日々を思い出す。正直今こうして景色を眺めていても、そんな日々があつたことなんて誰も信じてくれないほどに平和そのものだ。

カミュはそつと息を吐くと踵を返す。するとおんぼろの小屋が正面に映る。戸は開きっぱなしで、その奥であわただしく動き回っている奴がいた。

「つたく……おっせえぞマヤ。まだ支度できねえのか？」

カミュが不平を漏らし、右手を頭に置く。すると、マヤと呼ばれた奴は頬を膨らませてカミュに抗議する。

「うっさいなあアニキ……女つてのは時間がかかるもんなんだよ」

「お前は女らしくしてたことなんてあつたか？」

「んなっ!? お、オレだって年頃の女なんだぞ！」

「だつたらまず言葉遣いから直せ。セーニヤとかマルティナに比べたら全然だぜ」

カミュは両手を頭の後ろに組みながら呆れるようにため息をついた。それ故に、マヤがボソリと何かを呟いていたことに気づかなかつた。

カミュはとりあえず暇潰しに腰に差してある短剣を磨くべく、ポケットから布を取り出そうと手を突っ込む。だが、変に引っ掛かつてしまい、後ろに足をずらす。すると、じやりつと鈍い音がした。足をどけると、そこには土がついてしまったが、金色の欠片があつた。カミュはそれを拾い上げ、視界に映す。すると、脳裏に何かがよぎってきた。汚れてはいたが、そのなかで輝き続けている思い出が。

「……そういや、そんなこともあつたな」

「なんかいったかアニキ？」

「カミュがポツリと呟いた言葉がマヤの耳に届いてしまったようだ。カミュはあわててなんでもないと行って、布を再び取り出そうとする。今度はするりと取れ、カミュは刀身を丁寧に拭いていく。ちょうど、二人を裂く黄金の茨を断ち切ったものと同じだ。」

かつてマヤは、すべてを黄金に変えてしまうペンダントに取り憑かれ、全身を黄金に変えられてしまった。カミュは救えなかったという自責の念を抱いてそっと去って行ってしまったが、その間に魔王にマヤがつけこまれ、魔王の配下にされてしまった。心の闇を増大させたマヤと対峙したカミュは、友と共にマヤを縛る金の茨を断ち切つて、マヤを救いだした。そして彼女と約束したのだ。世界が平和になったら、二人で旅に出ようと。

「お、おまたせアニキ！」

漸く支度を終えた妹は両手に大きな鞆を持ちながら来た。カミュはその姿をみて頭を抱える。旅に出るというのにその大荷物にはつきりいつていただけでない。

「もう少しまとめるよ……そんなんじやつかれるだろ」

「女つてのは荷物が多くなるんだよ！」

「……はあ、まあいいや。とりあえずいくぞ」

カミュは腰につけたポーチの中身を確認し、雪道を歩き始めた。その横をマヤがにつこり笑いながら歩いていく。もう叶わないと思っていた光景がいま実現したと思うと、感慨深い。

「アニキ、最初はどこにいくんだ？」

「そうだな……お前のそのバカでかい荷物もあるし、船があるところに向かうぜ」

「じゃあクレイモランか？ でも船なんて貸してもらえるのか？」

クレイモランもありだが、カミュが考えていた場所とは違った。

「……いや、クレイモランじゃないぜ」

「えっ？」

疑問に思う妹をよそにカミュは目的の場所まで歩いていく。そして間もなくカミュは立ち止まった。ごっごつとした岩で出来た洞窟があり、中で下品な笑い声が響いてくる。

「ここだ」

「こ、ここつてまさか……?」

「そうだ、昔の俺達の職場さ」

「ま、まさかこのバイキング達から船を奪うのか!」

「そのままさかだ。いくぞ」

そういうとカミュは腰から短剣を抜き出し、入っていった。だがマヤは腕を引っ張って兄を止めた。

「しよ、正気かよアニキ!? あいつらは腕つぶしはいいし人数も多い! オレ達二人で勝てる相手じゃないぜ!」

二人は赤ん坊の時バイキングに拾われ、こきつかわれた過去がある。何度逆らっても歯が立たなかつた故か、マヤは必死に説得する。だが、カミュは笑うのをやめずポーチからあるものを取りだし、マヤに突き出す。

「いいからこれつけろ。偽物だけだな」

「な、なんだよこれ……それに偽物ってどういうことだよ?」

「そいつはあのペンダントのレプリカだ。お前、あいつらを一度金にしたことがあるんだろ?」

「ま、まさかそれで脅してつてことか?」

「そういうことだ。ペンダントの恐怖を刻み込んでいるはずだからな」

「な、なるほど……それならいけそうだな。よし……」

マヤはペンダントを首にかけると、カミュと共に洞窟に入っていた。洞窟を進んでいくにつれ、笑い声が大きくなり、思わず耳を塞ぎたくなる。どうやら手にいれた宝に対して狂喜してるようだ。

「へっへっへ! 今日は大漁だなおい!」

「世界が平和になって油断してるボンボンから奪い取れるからな!」

「銅や銀もたくさんだぜ! こりゃあ高く売れるな!」

「へえ……そりゃよかったな」

ゲラゲラ笑っている好きに背後へと迫ったカミュは不敵な笑みを浮かべた。

「お、お前はカミュか!? てめえ、いままでどこにいたんだ! 仕事サ

ボってどっかいきやがって！」

宝の山を囲っていたガタイの良い男が血相を変えてカミュの胸ぐらを掴まんと腕を伸ばす。だが、後ろにいるマヤの姿を視界に映すとびくつと腕を震わせ、その場でとどまった。

「お、お前は……あのときの!? や、やめろ近づくな！」

ガタイの良い男が情けない声をあげると他の男達も慌てて後ろに下がる。

「おいおい何をそんなにびびってるんだ？ 昔は俺達をコキ使ってたくせによ。いいぜ、金なんてたくさん持ってきてやるよ！ お前達を金にしてな！」

「や、やめろー！ なんでもする！ なんでもするから金にするのだけはやめてくれえ!!」

「へえ……今なんでもするっていったよな？ じゃあそうだな……船でももらうとするかな」

「ふ、船!? そ、そんな俺達バイキングは船なしじゃ……」

「じゃあまた金にされたいんだな。よしわかった」

「ま、待て！ 一隻だけならいい！ それ以上は勘弁してくれ！」

「いいぜ。ただし小さな船はなしだ。一番大きいやつで頼むぜ」

「……っ、わかった！ さっさと持ってけ泥棒！」

カミュは感謝するぜと吐くと、他のバイキング達はいそいそと船の準備を始めた。

「お、おまたせしました……」

「よし、乗るぞ」

カミュはマヤをつれて船に乗り込み、その後船首の舵を握った。

「拾ってくれてありがとよ！ まあとりあえずあばよ！」

カミュは不敵な笑みを浮かべると妹に帆を広げてもらい、発進した。洞窟を抜け、外から光が差し込んでくる。

そのときだった。水が突如もっこりと膨らんだのは。まるで水で出来た山だ。そしてそれはだんだんと面積を広げていき、飽和の限界を突破した瞬間、大量の水しぶきが弾けた。

「な、なんだ!？」

腕で覆い被さる水をかばいながら前をみると、そこには人間の数倍はある体軀を誇ったタコがいた。

「……ちっ、ここでクラークンか」

「な、なんだよアニキあれ……バカでかいぜ！」

「ただで船を渡すわけにはいかないぜ！ 俺のペットで捻り潰してやる！」

沖からは、さっきのガタイの良い男の声。どうやら奴がこのクラークンを飼っているようだ。

「魔物をペットか、趣味悪いな。おいマヤ、船尾の方に隠れてろ」

「貴様ごときが俺のかわいいクラークンに勝てるわけないだろ！ 長い間ここを離れていたから頭が腐っちまったんじゃねえか？」

「そ、そうだ無茶だぜアニキ！ あんなバケモンに一人で勝てるわけないだろ!?!」

ギャハハと哄笑する親玉に妹も悔しいが同調するしかなかった。あんなやつに勝てるわけない。兄が戦えることは知っているが、いくらなんでも敵う相手じゃない。

だが、カミュは背に納めた何かを二つ取りだし、それぞれ握るとマヤに笑って見せた。円形で周囲に太い刃がいくつも取り付けられている。いわゆるブーメランというやつか。見るからには強そうではあるが、それでも敵うとは思えない。

「心配するな、マヤ。こんなやつどうってことないぜ」

カミュは不敵な笑みを浮かべながら小さくその場で二回跳び跳ねた。二度目の着地を終えると、カミュの体が稲妻のごとく左右へと動き、くるつとその場で一回転した。その瞬間、カミュの体は3体に増えていた。

「なっ、アニキが三人!?!」

「な、なんだと!?!」

カミュの後ろには全身を青い色に染められたカミュが二体おり、クラークンを睨み付けている。

カミュは双方のブーメランを後ろに引き、構える。後ろの影も模倣するように腕を後ろに引いた。



「なんたつて、俺は魔王を倒したんだからなっ!!」

カミュはそういうと勢いよく腕を前に回し、思いきりブーメランを投げた。合計6本のブーメランが様々な軌道を描き、クラーケンへと襲いかかる。

「は、弾き返せ!!」

主の指示通りクラーケンはすべて弾こうと二本の触手を動かす。だが、鈍重なそれでは俊敏に飛ぶブーメランをとらえることができず、二本のブーメランに逆に触手を切り落とされてしまった。

「い、いぞアニキ!」

触手を失ったクラーケンは痛みにも悶えながらもカミュを睨む。だが、もう事は遅かった。残り四本のブーメランがクラーケンを切り裂かんと迫っているからだ。クラーケンは抵抗する間もなく、その身を縦横無尽に刻まれてしまった。血飛沫があたりに弾け飛び、暗い海を赤く染めていく。その度に痛みを訴える叫びが洞窟内にこだましている。

「く、クラーケン!! しっかりしろ!」

主の叫びをよそにおぞましい断末魔をあげながら力を失っていく。そしてその胴体は深い水の中へと沈んでいってしまった。

宙を舞っていたブーメランはカミュの手元に戻り、分身を解く。

「おい、もう出て来ていいぞ」

そういつてマヤを出させると、カミュは船からいきり跳躍して、親玉の元へと向かった。

「ひ、ひいつ?」

「よくも俺達を殺そうとしたな。まあ正直相手が雑魚で助かったけどよ」

静寂が場を包み込み、もう親玉を守るものはない。親玉は目に涙を浮かべ、必死に命を乞う。

「も、もうあなた達には逆らいません! ですから殺すのだけは勘弁してください!」

「俺達を殺そうとしたのに、自分がそうなると命乞いか。呆れたもんだな」

「つ、つい出来心だったんです！ もうしませんから！」

「そう簡単に許せることじゃないな。だが……そうだな、ひとつ条件がある」

「は、はいなんでしよう！」

「船と金を用意しろ。それで許してやる。船は今のやつでいい。金は金庫がすつからかんになるまでだ。いいな？」

「は、はい！ わ、わかりました！」

自分の命を優先してきたか。カミュはほくそ笑みながら金が出てくるのを待つ。

「お、おまたせしました!! 金です！」

「んまあ、こんだけあれば十分か。さて、じゃあ俺達は旅に出るからな、探さないでくれよ」

そういうとカミュはふたたび大きく跳躍して、船に飛び乗った。そして、帆を開き、舵をとって、洞窟の外へと漕ぎ出した。

差し込む光のヴェールに船が包まれ、視界が奪われる。そしてそれがだんだん薄れていき、剥がれたその瞬間。すみわたる青空、宝石のように輝く海、心地よい潮風が二人を迎えた。

「す、すげえ!! オレ、始めてみたよこんな景色！」

「だろ？ これからもっと、すごいものが見られるぞ！」

「アニキ!! まずどこからいこうか！」

「そうだな……どこにいくか」

興奮しているマヤを横目にカミュは舵を握りしめる。そしてカミュは、延々と広がる地平線を眺める。

「……お前達が消えたことで、この景色があるんだよな」

カミュはぼそりと呟く。今はもうこの世界にはいない二人の友を想う。あの二人は今頃それぞれの場所で元気にしているだろうか。

「なあマヤ。俺イシの村にいきたいんだけどいいか？ 途中寄り道とかはしてもいいからよ」

「イシの村か。確かアニキの友達がいるところだよな！ あのときは色々迷惑かけたし、話したいと思ってたんだ。いいぜ！」

もうそいつはここにはいないんだけどな。

カミュはその言葉をどうにか喉の奥まで飲み込んだ。悟られないように無理矢理笑うとカミュは舵を切っていった。

## 過ぎ去りし時を求めた友

星空が照らす海で船が揺れているなか、カミュは一人船首に立っていた。唯一の話し相手のマヤはもう船室で寝てしまっている。物見はカミュただ一人だ。

そうなることやることもなく物思いに更けるしかない。

「……そういや、昔はアイツと船の物見をしてたな」

今はもういない友人と、船首で遅くまで語り合ってたことを思い出す。シルビアの船の操縦者のアリスが寝る時にカミュたちが代わりにしていた。その時は、もう今は戻ってこない。

そのきっかけとなった出来事をカミュは思い出していた。

「僕は、過去にいくよ」

文字盤があちこちにちりばめられた、もう錆びかけている塔の、台座の前で親友は穏やかに、しかし力強く答えた。

もう二度とこの世界には戻れない。それどころか、時空の渦に巻き込まれ、永遠に虚無をさ迷うことになるかもしれない。そう、時の番人が言葉を濁さずに告げたはずだというのに。

皆は勇者を止めるべく、様々な言葉をかけた。ロウのじいさんは実の孫がもう永遠に消えてしまうことを悲しみ、セーニヤは死んだ姉と交わした誓いを破りたくないと言え、マルティナはアイツを守りたいと訴え、シルビアのおっさんは仲間を失いたくないと優しく、そして悲しそうに言い、グレイグは過去にいけない己の無力さに猛っていた。

でも、それでもアイツは過去にいくと決めたのだ。ベロニカを、そして他の死んだ人々を助けるために。

アイツの目は、あまりにまっすぐで、おっとりしてるようで、ものすごく熱かった。俺は思わず、目をそらしてしまった。これは、参った。何をいっても、もう無駄だろう。きつと、この中で一番長くいたであろう俺の言葉だって、届かない。

俺は、言おうと思っていた言葉を飲んで頭を掻いた。そしてため息

をついて、笑って見せた。

「……負けたよ。お前はおつとりしてるようでこういうときはガンコなんだよな！ わかったよ、もう俺は何にも言わねえ。いってこい！ もう一度世界を救ってくるんだ！」

「……カミュ。ありがとう」

アイツはこくつと頷くとみんなを見渡した。皆はなおも名残惜しそうにアイツを見ていたが、なんとか笑って見せた。そして、アイツに道を譲った。時をわたるための宝玉が鎮座されている台座への道

を。  
アイツは皆に礼を述べると、まっすぐ台座へと歩み寄る。そして時の番人に話しかける。あの台座の宝玉を勇者のつるぎで叩き割ったらもう、アイツはここから消えてしまう。それはわかっているが、俺はもうどうすることもできない。アイツが背を向けている時に俺は唇を噛んでいた。

「……わかりました。では勇者よ。前へ」

アイツはこくりと頷くと、台座の宝玉の前にたつ。もういなくなってしまう。俺はもう、抑えられなかった。いつのまにか足が動いていて、声をあげていた。

「ま、待ってくれ！」

アイツは声に気づき、振り向いた。覚悟を決めた表情に、またも目をそらしそうになるが、そういうわけにはいかない。

「過去で会う俺は以前のようにお前と敵対する身だろう。だが、しかし……お前が望むなら俺はふたたびお前に命を預けるだろう。何度だって、勇者を守る盾になる！」

グレイグは悲痛だが、武人らしい叫びをあげる。しかし、そんなグレイグにシルビアが近づいた。いつもみたいに過剰なスキンシップはしていない。

「んもう！ グレイグったら、かたぐるしい別れなんてヤボよ。旅立ちの挨拶は気楽な方がいいのよ。サヨナラなんて言わないわ。だってまた過去で会えるしね！」

嘘をつくなよ、シルビア。お前だって分かっているだろう？ もう

二度と、会えないんだぜ？

でもそれがまた、シルビアのよきでもあるんだけどな。

「あなたならどんな困難にも乗り越えられるわ……でも、無理だったらもう一度、私たちを頼ってね」

マルティナが憂いを帯びた表情で、しかし強い女らしく言葉を紡いだ。

「さあ、あなたのおじいさまにもう一度顔を見せてあげて」

そしてマルティナは、アイツの実のじいさんの最後の別れを取り持った。ロウは今にも泣きそうな表情を必死に堪え、笑顔を見せた。

「おぬしよ……立派な顔つきになったのう。なあに、ちよつとのあいだお別れする訳じゃよ。わしは今度こそ世界を救ってくれると信じておるぞ。なんといつてもこのわしの自慢の孫じゃからの。ほっほっほ」

アイツ、ロウのじいさんの言葉を聞いて少し目を細めている。アイツだって悲しいんだ。俺はそつと拳を握りしめる。

ふと横をみると、髪の毛の短い金髪の少女、セーニヤが俯いていた。何か言いたげだが、言えないようだ。

カミュは頑張って作り笑いを浮かべ、セーニヤの華奢な背中を押す。驚いた少女はカミュを見る。カミュはなんとか悟られまいと腕を組み、顎で行けと伝えた。セーニヤは静かに頷くと、少しずつ勇者へと近づいていった。

「……勇者様。私はあなたを守る使命のために必死にここまで歩いてきました。あなたと冒険した日々のことは私にとつてかけがえのない時間……私、絶対に忘れません。だから、勇者様……だから……」

セーニヤは涙を一滴、二滴溢すが、ずつと笑っていた。勇者の顔が、まるでシワのできた紙のように崩れ始めていく。それを見ただけで俺も、胸が締め付けられていく。

「また、私のこと……探しだしてくれませんか？」

彼女の、告白に勇者は静かに頷いた。

そして勇者は宝玉へと歩みより、剣を払う。そして天に掲げると、勢いよく振り下ろした。その直後、宝玉に幾千ものヒビが入り、光が漏れだしていく。剣は衝撃で砕け散り、刀身が宙を待っていく。光はあつという間に勇者を包み込み、眩しさの余り思わず腕で庇う。

横ではじいさんが涙ぐみながら孫に声をかけている。しかし、うまくたてずにその場で膝まついてしまい、マルティナが支えている。

今度こそ、もうお別れだ。カミュはバット地面を蹴り、光の届かないギリギリのところまで駆けて、叫んだ。

「勇者!! 俺達はもう一度お前と旅をするからな!!」

光の向こうにいる勇者は音もなく光に吸い込まれていく。カミュは手を伸ばさずに、ただ遠ざかる勇者の瞳を見つめていた。

わかっていた。もう一生、アイツと旅なんてできない。例え魔王でも、どうにもならない世界へとアイツはいっちまうんだから。でも、それでも言わずにはいられなかった。俺は信じ続けているからだ。勇者の奇跡ってヤツを。

だからーだからっ……………!

「また、会おうぜ……………!!」

そうカミュがいった瞬間、光は空間の中へと吸い込まれ、跡形もなく消え去った。

勿論、アイツの姿は、ない。あるのは、アイツが砕いた勇者のつるぎの破片だけだった。

「……………いっちゃったわね……………」

「……………ああ」

シルビアとグレイグは呆然とし。

「おお……………おおおお……………!!」

「ロウ様……………」

年甲斐もなく大泣きするロウと慰めるマルティナ。

「勇者、様……………っごめんさい、お姉さま……………」

ポロポロと瞳から滴をこぼすセーニヤ。

カミュは彼らを虚ろな瞳で見つめたあと、ふらふらと勇者の落とし

た破片へと近づく。そしてそれに触れた瞬間。

「……………くそつ、なんだよこれ」

カミュの頬になにかが伝う感触があった。触れてみると、それは滴だった。泣いたんだ、俺は。ほとんど泣いたことなんか、ないくせに。一度決壊したものは止まらない。カミュは必死に押さえようと堪えるが勢いは増していく。いつしかもう抑えることもせず、ひぎをついて叫んだ。

「う、うううわああー!! あああああー!!!」

カミュの、はじめての環状の吐露に皆感化され、それぞれが涙を流す。時の番人が何を考えているかわからないような目で見ていたが、気にしなかった。どうでもよかった。俺のなかで、大きな割合を閉めていたものが、ぽつかりと穴を開けて消えてしまったのだから。

「……………」

カミュは神妙な表情で静かな夜の海を眺めていた。そして、ポーチから銀色に美しく光る刀身を取りだし、それを撫でた。あの日以来カミュが大事にとっておいたものだ。親友の形見として、この身から離すつもりはない。

「……………ん？」

ふと空を見上げると、闇に染まった景色が徐々に払われていくのが見えた。物思いに耽っていたら、いつのまにか朝になっていたようだ。

カミュはとりあえず妹を起こすべく船首を離れ、船室へと向かう。その途中で食糧庫に寄り、在庫を確認した。もうあと二日分くらいしかない。あまりバイキングのやつらが持っていなかったのだろう。

カミュは地図を見ながら部屋まで向かい、ドアをノックした。そしてマヤはだるそうに起きて、着替えて部屋を出る。食糧庫から朝飯をいただいたあとでカミュは今後の予定を伝えるべく口を開いた。

「とりあえず食糧が足りないからソルティコに向かうぞ。通り道だしちようどいいだろ」

「ソルティコか……………たしかリゾート地だったよな？ いいぜ！ いこ



ういこう！」

マヤはパツと顔を輝かせて、その場でガッツポーズをした。カミュはふつと鼻で笑うと船首へと戻る。

「……そういえばソルティユはシルビアのおっさんの故郷だって聞いたな。ちようどいい、いたらシルビアに会おうとするか」

カミュはまたひとつ目的を作り、密かに笑うと港を目指して舵を切った。